

大学トップアスリートにおけるキャリア教育プログラム 作成に向けた縦断的検討

清水聖志人* 島本好平**

抄録

本研究は、大学生トップアスリートにおけるキャリア形成プログラム作成に向けて基礎的知見を抽出することを目的として、全国高校総体優勝等の優秀な競技成績を残し、2011年4月に大学に入学した男子レスリング競技者24名に対して、大学入学後から3年間にわたる7時点(2011年5月、9月、2012年3月、9月、2013年4月、10月、2014年2月)の縦断調査を実施した。各々の調査にはアスリートに求められるライフスキルを10側面(「目標設定」、「考える力」等)から評価することができる「大学生アスリート用ライフスキル評価尺度」(島本ほか、2013)を用いた。また7回目調査において職業キャリア関心性、自律性、計画性を評価することができる職業キャリア成熟度尺度(坂柳、1999)を併せて実施した。

各スキルの経時的変化を分析した結果、「目標設定」、「考える力」、「最善の努力」の獲得レベルが有意に向上し続けていることが認められた。さらに、これら3つのスキルと職業キャリア成熟度尺度を用いて実施した結果(項目レベル)の相関について分析したところ「目標設定」においては、「職業人になったら、自分から進んで積極的に仕事を行なおうと思う($r=.43$ $p<.05$)」をはじめ7つの項目、「考える力」においては、「将来の職業生活をどう過ごすかは、あまり関心がない($r=-.41$ $p<.05$)」をはじめ5つの項目、「最善の努力」においては、「将来、充実した職業生活を送るために参考になる話は、注意して聞く($r=.41$ $p<.05$)」をはじめ3つの項目との相関がみられた。

これらの結果から、キャリア形成プログラムの作成に向けて、「目標設定」、「考える力」、「最善の努力」の獲得にフォーカスする必要性が示唆された。

本研究は、大学入学から卒業までのトータル4年間にわたる縦断研究の3年目の報告である。今後は、4年目の縦断調査データから高度なレベルにて競技を行う中で獲得されたライフスキルがキャリア形成に結びつくのかを検証することが肝要となる。

キーワード：Dual Career,大学生アスリート,キャリア形成,ライフスキル,縦断研究

* (公財)日本レスリング協会メダルポテンシャルアスリート育成システム構築事業

〒115-0056 東京都北区西が丘 3-15-1

** 兵庫教育大学大学院 学校教育研究科

〒673-1494 兵庫県加東市下久米 942-1

A Longitudinal Study Aimed for Developing a Career Education Program for Top University Athletes

Seshito Shimizu* Kohei Shimamoto**

Abstract

The objective of this study was to extract fundamental findings for developing a career development program for top university athletes. A longitudinal study was conducted with 24 male wrestles that enrolled in a university in April 2011 that had achieved excellent performance in sports, such as winning the national inter-high school championships. These studies were conducted during seven different periods within the three-year period starting from after the subjects enrolled in a university (May and September 2011, March and September 2012, April and October 2013, and February 2014). An Appraisal Scale of Required Life Skills for College Student Athletes (Shimamoto et al., 2013), which evaluates the life skills required for athletes using 10 dimensions (i.e., goal-setting and thinking skills), was used for each study session. In addition, an occupational career maturity scale (Sakayanagi, 1999) was conducted in conjunction during the 7th study session to evaluate the occupational career interest, autonomy, and planning ability.

Analysis of each skill by temporal changes found that the acquisition levels of goal-setting, thinking skills, and giving one's best effort continue to increase significantly. Furthermore, examining the correlation between occupational career maturity scale results with these three skills (item levels) found that there was a correlation between goal-setting with 7 items including "If I become a professional, I think I will actively engage in work with my own volition ($r=.43$ $p<.05$)". Thinking skills was found to be correlated with 5 items including "I'm not that interested about how I will spend my occupational life in the future ($r=-.41$ $p<.05$)", while giving one's best effort was found to be correlated with 3 items including "I attentively listen to topics that will be of reference for leading a fulfilling occupational life in the future ($r=.41$ $p<.05$)".

These results suggested the necessity to focus on the attainment of goal-setting, thinking skills, and giving one's best effort for the development of a career formation program.

This study is a third-year report of a four-year longitudinal study that spans from university enrollment to graduation. In future, it will be crucial to examine whether life skills obtained from engaging in sports at a high level lead to career formation or not, by using longitudinal study data from the fourth year.

Keywords: Dual career, University athletes, career formation, life skills, longitudinal study

* Athlete Pathway Development Project Japan Wrestling Federation
3-15-1 Nishigaoka, Kita-Ku Tokyo, 115-0056

** Graduate School of Education Hyogo University of Teacher Education
942-1 Shimokume Kato Hyogo 673-1494

1. はじめに

2013年9月7日にブエノスアイレス(アルゼンチン)で開催された第125次IOC総会にて、2020年の夏季オリンピック・パラリンピック競技大会を東京で行うことが決定した。すでに文部科学省は、スポーツに関する競技水準を向上させ、アスリートが国際競技大会等で最高のパフォーマンスを発揮できるよう、環境の整備を推進している。文部科学省のオリンピック・パラリンピック関係予算が、平成25年度は756,70万円であったのに対して、26年度は、1,105,600万円に大幅に増加し、「2020年ターゲットエイジ育成・強化プロジェクト」や「メダル獲得に向けたマルチサポート戦略事業」が新規事業として盛り込まれていることから、日本のスポーツは育成・強化や医・科学をはじめとするサポート体制が整備されていくことが理解できる。

その一方で、国際競技舞台における活躍をめざし、高度なレベルで競技を行うアスリートのキャリア移行に関する問題が叫ばれて久しい。その中でトップアスリート及びトップアスリート予備軍である「大学生トップアスリート」は、特に厳しい状況に置かれているといえる。国際大会を目指し、非常に高度なレベルで競技に取り組む同アスリートは、トレーニングや国内外における遠征による時間の制約等により学業や就職活動に支障が生じ、競技引退後のキャリアをスムーズに獲得することが困難となるケースが少なくない(清水ほか、2010)。先述のように国費を投じて育成・強化を行う中で、アスリートが獲得した稀有なスキルを競技引退後も社会に還元する設えを構築することは、スポーツ政策を推進する上で重要な課題といえる。

既に欧州においては、「スポーツと教育の両立」を制度的に保証するため、2004年に **European Athlete as Student network** が設立され、教育と職業訓練の両面から、大学生アスリート等へのデュアルキャリア支援が実施されている(EAS、2004)。

しかしながら日本国内においては、大学生トップアスリートのキャリア問題に関する教育支援体制のみならず、研究や調査においても未だほとんど行われていないのが現状である。そのような中、清水ら(2011)は、「日常生活で生じるさまざまな問題や要求に対して、建設的かつ効果的に対処するために必要な能力」(WHO、1997)と定義される「ライフスキル」が、大学生トップアスリートのキャリア形成を促す要因の1つとなりうる可能性を指摘している。清水ら(2011)は、就職の決まった大学4年生の男子レスリング競技者を対象としてライフスキルに関するアンケート調査を実施し、就職活動の形態とライフスキル獲得レベルとの関係について調査

している。その結果、自らの競技経験を生かせる職業に焦点を絞り就職活動を行った群は、何らかのコンネクションを利用した群よりも、ライフスキルの獲得レベルが高いことを明らかにしている。

「ライフスキル」とは、「人々が現在の生活を自ら管理・統制し、将来のライフイベント(人生における重大な出来事)をうまく乗り切るために必要な能力」(Danish et al., 1995)と定義されていることから、理論的には、ライフスキルの獲得が大学卒業後のキャリア形成に正の影響を及ぼすことが考えられる。

しかしながら、先に述べたとおり、大学生トップアスリートを対象として、ライフスキルの獲得とキャリア形成との関係を実証的に明らかにした研究は未だほとんど見られないのが現状である。

なお、スポーツとライフスキルに関する国内外の研究を概観すると、スポーツを通じたライフスキルプログラムの開発に関する研究、プログラム実践の効果の検証に関する研究が多くを占めており、ライフスキルを獲得することによって、それが具体的にどのような成果へと結びついていくのかについては、あまり研究が行われていない。

大学生トップアスリートに対して、効果的なキャリア形成の為の教育を実施していくためにも、高度なレベルにて競技を行う中でどのようなライフスキルを獲得しているのか。ライフスキルの獲得がキャリア形成へと結びつくのか、仮にそうであるとすればどのようなタイミングで結びつくのか。また、就職後の昇進や転職、離職等のキャリアイベントとどのような関係にあるのかについて、縦断的に検証していくことが求められる。

2. 目的

本研究は、大学生トップアスリートにおける競技引退後のキャリア形成を円滑なものとする教育プログラム開発のための知見を得ることを目的としている。そのための視点として、「ライフスキル(life skills)」と呼ばれる学習(獲得)可能な心理社会的能力に着目し、ライフスキルが競技引退後のキャリア形成に与える影響を検討していく。研究方法としては、大学生トップアスリートを対象として、トータル4年間にわたる縦断調査を実施していく。縦断調査からは、高度なレベルでの競技活動がライフスキルの獲得に与える影響を検討する。大学生トップアスリートのキャリア形成のための教育支援のあり方について検討を行う。

本報告書は、トータル4年に渡る縦断研究の3年目時点の経過を報告するものである。

3. 方法

本研究は、大学生トップアスリートを対象に縦断調査を実施する。調査結果をトップアスリートのキャリア形成プログラムにダイレクトに反映させていくため、単一の競技を長期縦断的に調査していく。高度なレベルで競技を行う大学生アスリートを対象とするため、2012年ロンドンオリンピックにおいて金メダルを含む3個のメダルを獲得し、日本国内のレベルが世界トップレベルに位置していると考えられる男子レスリング競技を対象競技として選定した。

本研究において対象としたのは、全国高校総体優勝等の優秀な競技成績の残し、スポーツ推薦制度にて2011年4月に大学に入学した男子レスリング競技者24名であり、大学入学後から3年間にわたる7時点の縦断調査を実施した。各々の調査にはアスリートに求められるライフスキルを10側面(「目標設定」、「考える力」等)から評価することができる「大学生アスリート用ライフスキル評価尺度」(島本ほか、2013)を用いた。また7回目調査においては、職業キャリア関心性、自律性、計画性を評価することができる職業キャリア成熟度尺度(坂柳、1999)を併せて実施した。

縦断調査の結果を基に、大学の部活動において高度レベルで展開される競技活動を通じてライフスキルはいかに獲得されていくのか。また、それら獲得されたライフスキルと職業キャリア成熟度尺度の結果の相関を分析することで、アスリートのキャリア形成支援に繋がる新たな知見の抽出を試みた。本研究計画は4年にわたる縦断研究の3年目終了時点の調査報告として位置づけられる。

本研究は、以下、2つの研究手法を用いた。

研究Ⅰ. 大学生トップアスリートを対象とした、大学入学後から3年間にわたるライフスキル縦断調査

在学生を対象とした縦断調査からは、ライフスキルの獲得レベルの経時的変化を明らかにし、高度レベルにて展開される競技活動にて獲得されるスキルを明らかにする。

研究Ⅱ. 高度レベルの競技活動にて獲得されたライフスキルと職業キャリア成熟度の関連

研究Ⅰ.にて有意に獲得されているスキルと職業キャリア成熟度尺度を用いて実施した結果(項目レベル)の相関について分析を行う。

研究Ⅰ. 研究Ⅱ.により、高度なレベルにて競技活動を行う中で獲得されるスキルを明らかにし、それらスキルとキャリア成熟度の関連を明らかにすることで、キャリア形成プログラム作成に向けた基礎的知見の抽出を行った。

調査協力者

日々の練習時間に生活環境、競技レベルをある程度統一することを目的に、東日本学生レスリング連盟1部に所属する男子レスリング競技者24名(計5大学、1大学あたり3~7名)を対象とした。初回調査実施時点の平均年齢は、18.2±0.4歳、競技継続年数7.1±4.1年であった。全ての対象者が、スポーツ推薦制度を利用して大学に入学しており、国際大会のメダリストや全日本選手権優勝者等を含んでいる。

調査時期

下記の時期に質問紙調査を実施した。長期的には既に実施済みの2年間の縦断調査と合わせ、計3年間の縦断調査となる。

- ・ 2011年5月、9月
- ・ 2012年3月、9月
- ・ 2013年4月、10月
- ・ 2014年2月

調査内容

・ライフスキル:「日本一」等の優秀な競技成績を達成した一流のスポーツ指導者たちの実践的な経験をもとに開発されたライフスキル評価尺度(島本ほか、2010)を用いる。同尺度はアスリートにおいてその獲得が強く推奨されるライフスキルを、「ストレスマネジメント」、「目標設定」、「考える力」、「感謝する心」、「コミュニケーション」、「礼儀・マナー」、「最善の努力」、「責任ある行動」、「謙虚な心」、「体調管理」という計10側面から評価することができる(計40項目)。

・職業キャリア成熟度:「職業キャリア関心性」、「自律性」、「計画性」を評価することが可能な尺度であるが本研究においては、分析結果の解釈をより具体的に行うことを目的に因子レベルではなく、項目レベルにて分析を行った(全27項目)。

手続き

調査実施に際し、事前に各大学のレスリング部の監督やコーチに対して調査の趣旨説明を行い、調査実施の許可を得た。7回の調査とも、研究実施者が各大学のレスリング道場を訪問し、調査協力者に十分な説明を行った後に調査票を配布し、一斉法によ

る実施後その場で回収した。また、継続調査を実施することから、すべての調査は記名式により実施された。

統計処理

大学入学後3年間の競技活動を通じたライフスキル獲得レベルの経時的変化を7時点の縦断データを用いた反復測定分散分析により検証した。なお、7回目の調査に関しては、7時点目のライフスキル各側面と職業キャリア習熟尺度における各々の項目との関連性を相関分析により検証した。

すべての分析にはIBM SPSS Statistics 20.0を使用し、有意水準は5%とした。

4. 結果及び考察

本研究においては、大学入学時から3年間7回にわたり、ライフスキル評価尺度(島本ほか, 2010)を使用した縦断調査を実施した。なお、7回調査においては、職業キャリア習熟尺度を併せて実施し、ライフスキルが有意に獲得された側面と、職業キャリア習熟尺度の各項目の相関を分析した。今年度の研究は、トータル4年間にわたる縦断調査の3年目に位置づけられる。よってその途中経過を以下に示す。

4-1 大学運動部における高度な競技活動がライフスキル獲得に与える影響

大学入学時から3年間にわたるライフスキル経時的変化を、反復測定分散分析により検証したところ、「目標設定」において1回目調査と5回目調査間で有意差($p<.05$)が見られた(図1)。「考える力」においては、1回目調査と3回目調査の間($p<.05$)、1回目調査と6回目調査の間($p<.05$)、1回目調査と7回目調査間に有意差($p<.01$)が見られた(図2)。「最善の努力」においては、1回目調査と7回目調査間に有意差($p<.05$)が見られた(図3)。なお、すべての側面においてスキル獲得レベルが経時的に向上しており、低下する側面は、存在しなかった。

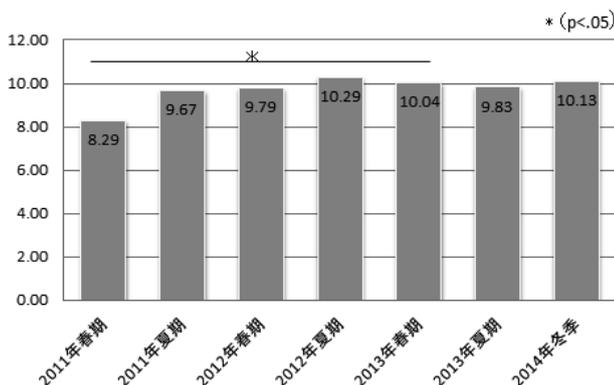


図1. 「目標設定」スキルの経時的変化

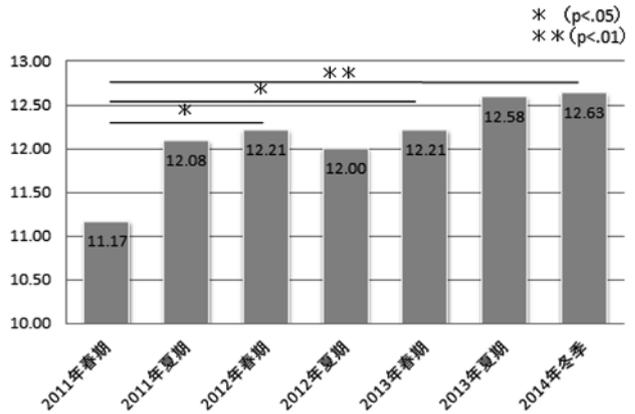


図2. 「考える力」スキルの経時的変化

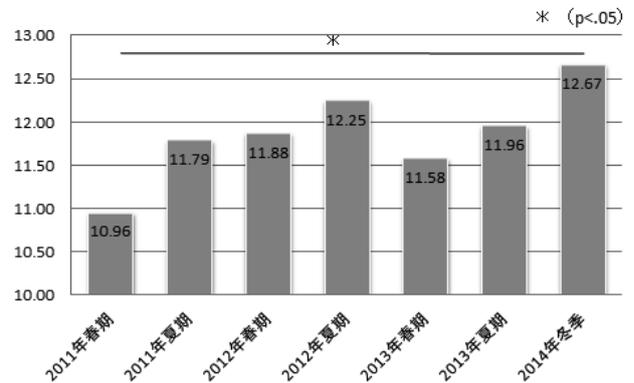


図3. 「最善の努力」スキルの経時的変化

4-2 有意に獲得されていたライフスキル各側面と職業キャリア成熟度の関係

各スキルの経時的変化を分析した結果、「目標設定」、「考える力」、「最善の努力」の獲得レベルが有意に向上し続けていることが認められた。さらに、これら3つのスキルと職業キャリア成熟度尺度を用いて実施した結果(項目レベル)の相関について分析したところ「目標設定」においては、「職業人になったら、自分から進んで積極的に仕事を行なおうと思う($r=.43$ $p<.05$)」をはじめ7つの項目、「考える力」においては、「将来の職業生活をどう過ごすかは、あまり関心がない($r=-.41$ $p<.05$)」をはじめ5つの項目、「最善の努力」においては、「将来、充実した職業生活を送るために参考になる話は、注意して聞く($r=.41$ $p<.05$)」をはじめ3つの項目との相関がみられた(表1)。

5. まとめ

本研究では大学入学後から卒業までのトータル四年間にわたる縦断研究の3年目時点における途中経過として、ライフスキル獲得レベルの経時的変化を明らかにするとともに、高度なレベルで競技を

表1. ライフスキル側面と職業キャリア成熟度の相関

ライフスキル側面	職業キャリア成熟度項目	相関
目標設定	q3 どのような職業が自分に向いているか、真剣に考えたことがある	r=.55 p<.01
	q4 職業人になったら、自分から進んで積極的に仕事を行おうと思う	r=.43 p<.05
	q11 将来の職業や就職先について、いろいろ比較し検討している	r=.43 p<.05
	q13 就職の準備は、他の人から言われなくても自主的に進めることができる	r=.44 p<.05
	q17 どのような職業人になりたいのか、自分なりの目標を持っている	r=.53 p<.01
	q20 将来、充実した職業生活を送るために参考となる話は、注意して聞く	r=.47 p<.05
	q21 職業選択や就職は自分にとって重要な問題なので、真剣に考えている	r=.43 p<.05
考える力	q6 職場で難しい問題にぶつかっても、自分なりに克服していこうと思う	r=.56 p<.01
	q8 どのような職業に就きたいか、まだわからない	r=-.55 p<.01
	q15 職業生活を充実させるためには面倒なことでも積極的にチャレンジする	r=.44 p<.05
	q16 自分は将来どのような職業に就いているのかわからない	r=-.52 p<.05
	q19 将来の職業生活をどう過ごすかは、あまり関心がない	r=-.41 p<.05
最善の努力	q3 どのような職業が自分に向いているか、真剣に考えたことがある	r=.41 p<.05
	q20 将来、充実した職業生活を送るために参考となる話は、注意して聞く	r=.41 p<.05
	q25 自分の将来の職業生活の様子は、だいたい想像できる	r=.45 p<.05

う中で有意に向上していたスキルと職業キャリア習熟尺度の関連を検証した。

その結果、「目標設定」、「考える力」、「最善の努力」という3つのスキルが有意に獲得されていた。さらに、これら3つのスキルと、職業キャリア習熟尺度の各項目と相関を分析したところ、「目標設定」においては7つの項目、「考える力」においては5つの項目、「最善の努力」においては、3つの項目との相関がみられた。よって、ライフスキルを活用したキャリア形成プログラムにおいて、「目標設定」、「考える力」、「最善の努力」を中心としたプログラム構成を行う必要性が示唆された。

今後は、4年目の縦断調査データから高度なレベルにて競技を行う中で獲得されたライフスキルがキャリア形成や就職獲得に結びつくのか。また、就職後の昇進や転職、離職等のキャリアイベントとどのような関係にあるのかについて、縦断的に検証していくことが肝要となる。加えて、アスリートは、競技者として卓越することを目指していることから、教育プログラムの実施が競技力向上にも有益な役割を果たす様なプログラム構成が求められる。よって、4年間にわたる長期縦断調査から競技力（競技成績）とライフスキルの関連も明らかにし、「スポーツと教育の両立」を実現するための教育プログラム開発を推進していくことが肝要となる。

参考文献

Danish, S. J., Petitpas, A. J., and Hale, B. D.(1995)Psychological interventions: A life development model. In : Murphy, S. M.(Ed.)Sport psychology interventions. Human Kinetics: Champaign, IL, pp.19-38.

文部科学省ホームページ

http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/athletic/_icsFiles/afieldfile/2014/01/31/1343722_01_1.pdf
(閲覧日 2014-2-25)

坂柳恒夫(1999)成人キャリア成熟尺度(ACMS)の信頼性と妥当性の検討. 愛知教育大学研究報告, 48(教育科学編)48: 115-122.

島本好平・東海林祐子・村上貴聡・石井源信(2013)アスリートに求められるライフスキルの評価—大学生アスリートを対象とした尺度開発—. スポーツ心理学研究, 40(1): 13-30.

清水聖志人・高橋義雄・河野一郎(2010)大学運動部の指導・運営内容差異による就職状況の比較—レスリング競技者を対象として—. スポーツ産業学研究, 20(1): 119-129.

清水聖志人・島本好平(2011)大学生トップアスリートのキャリア形成とライフスキル獲得との関連. 日本体育大学紀要, 41(1): 111-116.

The European Athlete as Student. The Dual Career Network.

<http://www.dualcareer.eu/home.html>.
(閲覧日 2013-6-25)

WHO(1997). 川畑徹朗・西岡伸紀・高石昌弘・石川哲也監訳 WHO life skills educational programs(pp.9-30). Tokyo: Taishukan.

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。